

18世紀のオナニズム：ティソを中心として

阿尾, 安泰
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門：教授：国際文化学

<https://doi.org/10.15017/18356>

出版情報：言語文化論究. 25, pp. 53-63, 2010-03. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

18世紀のオナニスム ——ティソを中心として——

阿 尾 安 泰

今日では、オナニスムは大きな問題とはみなされず、かつてのように人生相談の欄などにすら取り上げられるテーマともならなくなっている。しかし、それが重要な課題とは捉えられず、人々の監視の目から離れるようになったのは、思うほど昔のことではない。実際、オナニスムをめぐる抑圧と解放の過程はそれだけで大きな研究テーマとなり得るものである。性的活動について宗教、政治権力などから加えられる禁止とそれに抗する侵犯行為は、人類の歴史において数々の重要な局面を作りあげてきた。オナニスムをそうした多様な活動の中の要素のひとつとして考えて、探求を進めていくことは、新たな可能性を開くとも思われた。特に、近代の個人が自由の意識にめざめ、そこに加えられる抑圧からの解放を求めようとする時、性が大きな主題となることも周知の事実であった。それゆえ、オナニスムを他の性的活動とともに、その禁止をめぐる問いかけの運動の中から論じることもできるだろう⁽¹⁾。

ただそのように一般的、総合的な形で問題を追及しようとするときに、抜け落ちてしまう点も存在することを忘れてはならない。すくなくとも、以下のふたつのことは見逃すわけにはいかないだろう。まず第一に考えなければいけないのは、抑圧を問うにしても、常にオナニスムが悪しきものとみなされたわけではないということである。17世紀まではあからさまなオナニスム批判の言説は存在しない。場合によっては、人体に及ぼす積極的な効果が指摘された事例すらある⁽²⁾。第二に強調すべきは、この反オナニスム運動が常に同じ形で展開したわけではないということである。18世紀以降反オナニスム運動が展開していくが、その激しさが高まるのは、18世紀末から19世紀にかけての時期である。このときオナニスムはまるで今日のエイズを思わせるような扱いを受ける。なぜこの時期に、これほどの注意、監視が集中するのかが、問われるべきであろう。さらに、その情熱がわずか1世紀のちに煙のように消失してしまうことを思えば、この揺れ動きの謎に向けて、研究が進められるべきであろう⁽³⁾。

実際、反オナニスムキャンペーンが展開していく時期に位置する革命史においても、その行為の記録事例を認めることができる。マリー・アントワネットの裁判において、それは現れる。かつての王妃を断罪するための材料として、このスキャンダルが利用される。王太子が密かにこの性行為にふけたことが見つけられ、そこから王太子は王妃らの手ほどきでこの悪習にそまったという証言が引き出されるのである。貴族階級の墮落ここに極まれりというわけで、一気に裁判において被告を追い込んで行こうという作戦がそこにはある⁽⁴⁾。

19世紀において、オナニスムはさらにゆゆしさを増し、重要な社会的問題とみなされていく。その害悪は個人のレベルで考えられるものではなく、影響力の大きさから社会全体でその被害を最小限に食い止めることが要請される。その悪しき連鎖が人々をつかむのを阻止しなければならないのである⁽⁵⁾。

こうして、反オナニスム運動は、17世紀までの傾向とは打って変わって、18世紀以降急激な高まりを示し、19世紀に突入する。しかし、すでに述べたように、急速に衰弱していくことも事実なのである。今日の医学史の文献をみても、この運動に言及しているものは、実に少ない。あれほどの熱狂にたいして、この忘却には驚かされる。別に、18世紀が医学史的空白、暗黒の時代であったわけではない。シュタール、ホフマン、ブールハーヴェらをはじめとする優れた医師たちが活躍するとともに、生氣論などをはじめとして数々の医学史上重要な議論が行われ、後の時代の医学の基盤を作ったのである。しかし、反オナニスム運動が、研究史の中で取り上げられることは少ない⁽⁶⁾。

この不思議な運動の中心には、ある重要なテキストが存在する。ティソの『オナニスム』である。このスイス人医師の書いた書物が、動きに確かな歩みを与える。ただ18世紀において大きな影響を及ぼしたこの著作ではあるが、19世紀においては反オナニスム運動の進展とは裏腹に、すでに批判の対象となっていく。その科学的根拠、論拠の薄さが攻撃されるのである⁽⁷⁾。そして、ティソ自身も医学史においては、ほとんど言及されることはなく、される場合も『オナニスム』の作者としてではない。反対派も存在したこの時代にあつて、種痘を支持し、天然痘などの治療に貢献した功績や、人々の健康に助言を与える著書を書いたことなどが、ごくわずかに語られるだけである。このように判断が時代と共に動き、栄光と批判そして忘却の時を生きた著者とその著作をここでの研究対象として、分析していくこととしたい。

1 運動の始まり

確かに19世紀には批判の対象、そしてその後に忘却の彼方に沈むとしても、18世紀においては、ティソの書物が大きな反響を巻き起こしたことは事実として認めないわけにはいかない。しかし、その大きな流れに触れる前に、奔流を生むもととなった、もうひとつの問題の作品について語る必要があるだろう。それは1715年の終わり頃、ロンドンで出版された作者未詳の『オナニア』である。この本にはオナニーがもたらすとされる害悪が事細かく、それも怖ろしい筆致で描かれていた。一見すると医学書であり、病む人々に快方に向かう指針を与えるかのような印象を与えた著作ではあったが、それは偽りであった。というのも、この本の末尾には、出版元の書店に問い合わせれば、この病の特効薬が入手できると書いてあったからである。この著作はあくまでも販売面での成功を目指したものであり、実際この販売戦略は成功したのである⁽⁸⁾。

ただ、この手の成功はそれなりの成果をあげるにしても、つかの間のものとなるはずであり、後につづくものもなく消え去るはずであったろう。それを大きな流れに作りかえていった人物が、サミュエル＝オーギュスト・ティソである。ティソは1728年スイスのヴォー州で生まれ、南仏のモンペリエ大学で医学を修め、医学博士号を取得する。その後スイスのローザンヌで開業し、わずかの期間を除けば、その地にずっととどまり、1797年に没している。オナニスムに関する著作はすでに1758年に書かれているが、それはラテン語であり、さらに胆汁質に関する主論文につけた付属論文であった。その2年後の1760年に今度はフランス語版として分量を増しながら出版される。1764年にさらに増補されて刊行される。このあたりで人々の注目を集めていく⁽⁹⁾。そして、続々と再版が出されていく。18世紀においてフランス語版だけでも31版が出ており、その翻訳も18種類を数えている。その内訳はドイツで8種、英国で6種、イタリアで4種となっている。批判を受ける19世紀でさえ、フランス語版は32種、海外翻訳も16種で、その内訳はドイツが4種、イギリスが1種、スペインが6種、イタリアが4種、ロシアが1種となっているのである⁽¹⁰⁾。

こうした数字をみる限り、この書物の影響力の大きさは否定できない。山師的な作品である『オナニア』が示した方向に医学的な支えを与えたのが、ティソの『オナニスム』であったと言えるで

あろう。ティソは『オナニア』の販売戦略的な面は否定するが、あげられている症例を無視することはない。その乱雑な一覧表の整理をティソは始める。そして、そこに医学的な根拠を与えていく。症例を分類するとともに、これまでの医学の歩みを振り返りながら、ヒポクラテスやガレノスなどの古代の権威を持ち出すとともに、ハラー、ホフマンなどの同時代の学者たちの見解も取り入れながら、信頼に値する医学的な言説群を作っていこうとする。こうして、際物的な世界が整序ある医学の世界へと変貌しようとする⁽¹¹⁾。こうして反オナニスム運動が、その基盤付けとともに始まっていくのである。『オナニア』だけではなしえなかったことが、ティソの『オナニスム』とともに開始されていく。ティソの影響力が大きかったことは、その再版数の多さが示すだけではない。影響を受けた著作が次々と書かれたことから推し量ることができる。重要なものとしては、ビャンヴィルの『ニンフォマニア』があげられる。この書は特に女性のオナニスムに焦点を当てた点においても注目すべきである。本論文においても、ティソの著作の目指していたものを明らかにする中で、補助文献として言及することとする⁽¹²⁾。

2 フーコーに導かれて

ティソがこの反オナニスム運動の基礎を構築したことを認めるにせよ、問題がまだ残ることは否定できない。それは、なぜ18世紀という時代にそうした作業がなされたかということである。それまでは、ほとんど人々の関心を引かなかった事象が、どうして18世紀において、あれほどの高まりに遭遇したのだろうか。現象自体は以前からあるのに、なぜ18世紀という時代にあのように突出した事態が生じたのだろうか。

これまでの研究史においては、プロテスタント勢力の増大や30年戦争を集結させたウェストファリア条約締結後の政治体制などといった数々の要因が言及されてきた。ここにおいて探求の導きとなるのが、最近の研究を踏まえながら、独自の問題点を提起するミシェル・フーコーである。フーコーはファン・ウーセルの業績を踏まえて、18世紀に起こった変化について言及している。18世紀において資本主義が発達する中で、身体に対する態度が変わっていく。これまで身体は快樂本位の器官であり、各個人の管理の対象であったが、資本主義が発達する中で、身体すら個人的消費の対象ではなくなり、生産の道具として、社会全体の発展という過程の中で、規制されるべきものとして捉えられる。個人の手を離れ、社会的な効用性、生産的効率性という大きな目的のために身体は利用されなければならなくなるのである。そこで生殖という目的に合わない不毛な性的な行為としてのオナニスムは断罪されねばならないというわけである⁽¹³⁾。

説得力を持つかにみえるこの見解に対し、フーコーは全面的に賛成するわけではない。それによってすべての事態が説明できるわけではないとし、疑問を提示する。フーコーはふたつの問題点を指摘する。

(…)そうした分析にたいして私は、二つの点において居心地の悪さを感じています。つまり、十八世紀の自慰撲滅キャンペーンが、確かに、快樂の身体を抑制して能力本位の身体ないし生産本位の身体を称揚するというプロセスに組み込まれているとしても、そのことによってはうまく説明されない点が二つある、ということです。(…)なぜ、性的活動一般ではなく、自慰が問題となったのでしょうか。(…)次に、自慰撲滅運動の特権的な標的となるのが、労働する人々ではなく、子供ないし青少年である、という点も、やはり奇妙に思われます。しかも、この運動は、基本的に、ブルジョワ階級に属する子供や青少年を標的としています⁽¹⁴⁾。

重要なのは、性的活動一般に注目が集まったのではなく、その一分野であるオナニスムだけが撲滅運動の対象となったことである。さらにそれが性的な活動を担う人々すべてを管理、監視するのではないということである。このような限定条件のもとに、反オナニスム運動が展開した。そして、フーコーはこの限定を些末な問題ではなく、事態の本質を規定する条件として重視する。彼は、青少年の身体に注目し、それを注意深くコントロールしていこうとする権力メカニズムの始動を問題にするのである。家庭においてオナニスムに陥っている子供を見つけ出し、この行為を道徳的な問題と考え、家庭内で処理するのではなく、社会的に害悪をなす反社会的な危険ととらえ、それを管理する者として医師の協力をあおぎながら、事態の解決をはかっていこうとする態度が生まれる。ここにおいて家庭と医師とを結びつける権力機構が発生し、最終的に家庭と医学の監視体制をバックアップするものとしての国家の正当性が確立されるのである。子供という一要素を介して、家庭、医学、国家がつながり、そこを貫く権力の網目が揺るぎないものとなる。

(…) 自慰は不道徳の領域ではなく、病の領域へと組み入れられる、ということです。自慰は、いわば普遍的な実践とされ、すべての病がそこから発生する危険で非人間的かつ怪物的な「X」とされます。その結果、必然的に、家庭内部において両親に課せられた管理が、家庭外部における医学的な管理に繋ぎ合わされることになるのです。(…) 両親による管理が、医学的、衛生学的な介入に従属し、それに対して開かれていなければならないということ、問題を察知したならばすぐに医師という外的で科学的な審級に対して開かれていなければならないということを意味してもいます⁽¹⁵⁾。

このようにオナニスムという限定された行為の分析を通じて、近代から現代にまで至る権力の大きな発展過程を明らかにしようとするフーコーの手際は見事である。確かに、反オナニスム運動が持っていた歴史的な課題が当時のコンテキストに即してよく理解できるように思われる。ただそうした功績を認めた上でも、言わねばならないのは、そこにおいてティソの著作が具体的な姿で見えてこないということである。ティソの作品が担おうとしていたイデオロギー的な役割は理解できるが、そのテキストの取る形態、構造についての言及はない。以下において、その具体的な様相に注目しながら、ティソの『オナニスム』について考えてみたい。

3 ティソの『オナニスム』とは — 書くことの前提

ティソの『オナニスム』とはいかなるテキストなのだろうか。今日その名が言及されることがあっても、内容の方は明確な形では問題とならないこの著作について考えてみたい。すでに述べたように、この著作は単独で現れたものではない。1758年に書かれた胆汁質に関する論文の付属文書として書かれたのが最初であり、このときはラテン語で執筆されていた。この2年後にフランス語版で独立したオナニスム論が出版されるが、その際かなり分量が増えることとなる。そして、この増補された作品の読解に入ったとたんに、現在我々が無意識のうちに想定する医学的な著作とは異なる姿がそこにあることに気づかざるをえない。言説を構築するための前提条件が存在する。執筆にあたって、フランス語で書くという決意表明がある。読者に語ることで、恐怖を呼び覚ます可能性が生まれることも意識されている。

訂正が実に多かったので、書物はほとんど書き下ろしたようになり、ずっと長くなった。現用語たるフランス語でこのような企てを行うという困難さ、そしてそこからくるあらゆる

不都合さが、たえずつきまとうことになった。このような試みはうまくいけば人類全体のためになるという強い動機だけで私は決心したのであった（…）。この作業を困難なものにしているのは、使えどどうしても慎みをかいたものになってしまうような言葉や表現を用いて人々に説明していかなければならないということである⁽¹⁶⁾。

ラテン語を使えば、オナニスムが引き起こすとされる恐ろしい症状を読める人は限定される。医師などの専門家、知識人くらいであろう。そうした選ばれた人々であれば、惨状を目にしても、的確な判断を期待できるはずであるが、そうした見通しが今乗り越えられようとしている。慎みのために語らないことよりも、想定される危険を告知すべきだという社会的な判断が優先するのである。オナニスムの恐ろしさを知らずに多くの若者がその闇に落ちて行くよりも、害悪を語ることにより、その被害を食い止めようとする社会的防衛意識が先行する。そこにおいて現用語であり、より多くの人々が理解できるフランス語で執筆する決意が生まれる。そしてその決断は半端なものではありえない。いくら社会的有用性を説いても、オナニスムが喚起する欲望の連鎖の描写が、読む人の心に邪念を吹きこむ恐れがないわけではないからである。ただそうした危険の可能性が存在するにしても、語ることで人々を悪の道から救うことができるはずだという見通しが打ち勝つのである⁽¹⁷⁾。そうした傾向はティソだけではなく、後につづくビヤンヴィルにも受け継がれている。

私は尊敬すべき方がこのように遠慮しすぎること非難しようとする気はないが、そのように口を閉ざすことを見習うべきとは思えない。同胞のためを思って筆を執る人ならだれでも、羞恥心の真に命ずるところをわきまえねばならず、かつそれに服すべきだということを、私は十分に心得ている。そして私がここで用いる手段も、（…）こうした徳を強化することにしかならないと確信している⁽¹⁸⁾。

このように社会的有用性により、書くという行為が正当化されている。オナニスムについて書くことで性的な好奇心を喚起する恐れよりも、その情報によりこの悪弊から若者を救うことができるという社会的な観点の方が勝るのである。それでは、医師たちが怖れ、避けようとした言説とはいかなるものだったのであろうか。それはポルノグラフィックな言説であった。オナニスムについて描写することで、オナニスムに耽る人物を描くポルノグラフィックな小説と同列にみなされることが懸念されたのである。医師たちは、ポルノグラフィックな表象とは微妙なずれを示すテキストを生み出そうとした。エロティックな作品と医学的な文献にあらわれる描写とは異なるのである。前者においては、この行為にふける主体は成人であることが多いのに対し、後者ではむしろもっと若い少年少女層である。そして、前者においては、もっぱら女性がその行為を担う主体であるのに対し、後者で言及されるのは、主として少年たちである⁽¹⁹⁾。こうした差異をもって構成されていく医学的な言説について、具体的に見ていくことにしたい。

4 18世紀の医学的言説

社会全体で取り組むべき課題としてオナニスム撲滅運動が展開するにしても、その進み方は今の我々が想像するのとは異なっている。医学的な言説も現在想定するようなものとは異なっている。オナニスムを断罪するにしても、その症状などを臨床的に確認しながら、順序立てて考え、対策を講じていくのではない。確かに、症例は詳細に紹介されていくが、その展開の仕方は今日の我々からすると、科学的叙述というよりは、物語の描写のようなものに思えてしまう。たとえば、ティソ

が症例を紹介する仕方を見てみよう。

私が紹介する症例は、劈頭から地獄絵図となることだろう。私自身、その不幸な患者を初めて診た時はすくみあがってしまったほどである。そして、若者たちが自ら進んで飛び込んでいく深淵がいかにおそろしいか、あますところなく示してやらなければとの感がいや増したのは、他ならぬその時であった⁽²⁰⁾。

確かに、オナニズムの恐ろしさを伝えたいという気持ちは理解できるが、この語り方が現在の医学的な言説と比べて、大きくずれていることは否定できない。客観的な事実を述べる前にすでに、恐怖を吹き込んでおこうとする意図が先行しているようである。物語などが依拠する想像力の助けを借りても、この病の恐ろしさを了解させようとしている。その言語戦略においては、医学も物語もそれほど差が無いかのようにも思える。そうした気になるのも、実際の症例の紹介においても、現在の我々からすると、そこに物語を見いだしてしまうような印象を受けるからである。

時計職人の LD.*** は 17 歳までは品行方正で健康にも恵まれていた。だが、その頃から彼は日々マスターベーションに耽るようになり、3 回も繰り返す日さえ珍しくないというありさまだった。(…) 彼はこの汚らしい行為にすっかり魂を奪われていて、他のことなどはや考えられない状態だった。(…) 彼はありとあらゆる体の力を失った。職も放棄せざるをえず、何もできず、貧困にあえぎながら数ヶ月の間ほとんど何の救いも無い状態で衰弱していった。(…) 彼の状態を知らされた私は、早速彼の家に赴いた。そこで見いだしたのは、生者というよりまさに屍だった。痩せこけ、青ざめ、薄汚れてひどい悪臭を放ち、ほとんど何の動作もできずに藁の上に横たわっている。(…) まさに犬畜生にも劣る存在で、その思いもよらぬ惨状を見ては、この男がかつて人類に属していたなど、どうして信じられようか⁽²¹⁾。

瀕死の病人のもとにかけつける医師という場面設定をした上で、オナニズムの被害の大きさを、読者に最大限に、いわばドラマティックに伝えようとする語りの意志をここにみることができる。語りの戦略のもとに書かれる医学的なテキストをピヤンヴィルの中にも見いだすことができる。こちらはさらに物語性が増すようである。昔自分が可愛がっていた知り合いの娘エレオノールがオナニズムのために精神に支障をきたし、それがために女子修道院に入れられる。ところが、ろくな治療も受けさせてもらえず、病は進行する一方である。それをみかねた医師が、修道院に乗り込み、娘をそこから救いだし、自分が治療にあたり、最終的には彼女は快癒するというものである。その語りの中の惨状の描写場面を見てみよう。これも、ティソの場合と同様に、導入が威嚇的な調子で始まり、次第に恐るべき状況の描写へと移っていく。

不運な娘たちよ、近づいて見るがよい、そして汝らがみだらな情念の侵入にたいし、自らの弱い心を開いた瞬間を呪うがよい。耳を傾け、これから私が語る地獄絵図に震え上がらずにいられるものならそうして見せるがいい！

ああ、あまりにもおぞましく、身の毛もよだつ光景！ (…)
「あまりにも可哀想なエレオノール。これが貴女なのか？ かつてあんなにも愛らしく、また愛されてしかるべき方とお見受けした貴女だということか？ (…)
残酷な運命よ！ 何と信じがたい変貌をもたらしたのだ！ (…)
この期に及んでまだこの哀れな肉体を飾ろうということか、排泄物におおわれながら、この汚

らしく臭い物を白粉、香水、口紅とばかりにいじくり回す。(…) おお、破滅に導く恋愛よ！まさに地獄の情念であるお前は、彼女を虐待しているあの尼僧たち以上に非情で、悪臭を放つこの恐るべき独房よりもはるかにおぞましい⁽²²⁾。

ここでみられるような感嘆調の挿入句は、現代の観点からすれば、医学的なテキストにはふさわしからぬものと思われる。しかし、当時としては、読む者に大きな印象を与えるものとして許容されていたのであろう。語りにおいて読者をつかもうとする戦略がそこにはある。ただそのように読者の感受性に依拠した働き方を志向するかぎり、欲望を刺激するものとしての悪書を批判しようとしても、あまり説得力を持たないのではないだろうか。感受性の刺激という点では悪書と医学テキストとの間に明確な差異を見つけることが難しいからである。むしろその言語戦略の相同性にこそ、18世紀的な知のありかたを求めていくべきなのかもしれない。さらにオナニスムにかんする語り方は医師という語り手を通すほかに、手紙という形を取る場合もある。つまり、オナニスムに苦しむ者が医師に向けて、手紙を書くというものである。そこでは語りは一人称となる。

私は今 23 歳です。マスターベーションは 14 歳から 18 歳までしていました⁽²³⁾。

このようにあらゆる手段を動員して、反オナニスムの「物語」を構築するという意志、それが18世紀の反オナニスムの医学テキストに存在したように思われる。そうした傾向はすでに指摘したように、19世紀の前半には批判されることになる。ラルマンは1838年に以下のように書いていた。

ティソの『オナニスム』は(…)大きな反響を引き起こした。非常に評価されるとともに、激しい批判を浴びることにもなったが、それも理由のないことではない。科学的な見地からすると、それは古き権威からの脈絡のない引用と根拠薄弱の突拍子もない理論やとんでもない観察記録の寄せ集めに他ならないからである⁽²⁴⁾。

そして、物語的描写に代わって彼が展開するのが、より客観的とも言えるスタイルである。

症例51

15歳で自然にマスターベーションを始め、20歳まで続ける。遺精あり。
29歳まで健康状態絶えず悪化。持続的で頻繁な勃起。肛門付近の痛み。
焼灼法効果なし。回虫、駆虫薬で速やかな治癒⁽²⁵⁾。

ただここで注意しなければいけないのは、進化論的な展開を言わんがために、18世紀の医学的テキストに言及したわけではないということである。18世紀の医学が未成熟で19世紀において完成されていくというような議論をしたいわけではない。オナニスムを断罪するという同じ目的を持ちながらも、18世紀と19世紀でその言説に違いが現れていることを指摘したいのである。そして、その差異から、18世紀のテキストを支えているものをこれから考察してみたい。

5 恐怖をめぐって — 反オナニスム言説をささえるもの

ティソそしてピヤンヴィルのテキストを支えているものとは何だろうか。彼らが語りの戦略を駆使して、伝えようとしているものは何だろうか。18世紀という時代を考え、総合的な見地から考え

ていくとき、「恐怖」がそうした反オナニズム的な言説を支えているように思われる。もちろん彼らはオナニズムという病気の防止のために書いていると言うであろうが、彼らの書いているテキストが示しているのは「恐怖」の描写であるように思える。もう少し適切な形で言えば、彼らが漠然と感じていた対象に対し、オナニズムという枠をあてはめてそこから「恐怖」という構成物を作り上げたのではないだろうか。オナニズムは不定形の対象をとりあえず固定化し、実体化する装置の役割を果たしたように思われる。

ここでオナニズムという限定的な枠を離れ、その事象が生起したコンテキストを形成する時代環境を考察してみよう。18世紀は啓蒙の時代、官能の時代、感情の時代などと多様に形容される。しかし、その一方で恐怖の時代でもあった。ある種の不協和音が絶えず混じり込むのである。たとえば、フランスに限定して、歴史の流れを辿ってみよう。1727年にはサンメダール教会で後に痙攣派と呼ばれる信者たちに影響を与える事件が起こる。若い助祭フランソワ・ド・パリの葬儀の最中に不思議な現象が起こったのである。参列していた人々の障害が次々と治療されていったのである。またパリ民衆の間では1750年代には、官吏による児童誘拐、監禁などの疑惑が共有されていて、暴動なども発生した。不治の病に苦しむ貴婦人が、妙薬として子供の生き血を求めているという噂も流された。そして1757年には、権力の最上位に位置するルイ15世に対し、ダミヤンは暗殺を企てる。こうした不安定さの意識は無意識のうちに人々の間に連続して継承されていくように思われる。ルソーですら『対話』に付けた注の中で、時代が進む中で、不安定感を間接的に示している⁽²⁶⁾。

こうした茫漠たる浮遊感、不信感の中で、対象に明確な輪郭を与えるものが、合理的であろうが非合理的に見えようが、志向されていく。その方式を現在の感受性で判断しても無益なこととなる。オナニズムもある種の固定性を与える枠組みとして選ばれたのではないだろうか。実際、この時代に恐怖の対象として選ばれたものはオナニズムだけではない。たとえば、理性の世紀という呼称にもかかわらず、吸血鬼に関する議論は18世紀において盛んになるのである。またそれと並んで「早すぎる埋葬」についての恐怖が人々の間の話題となる。つまりまだ完全に死んでいなかったり、あるいは埋葬されたあとで覚醒する人々が味わうであろう恐怖が人々の心を捉えていくのである⁽²⁷⁾。

こうして18世紀はオナニズムを用いて「恐怖の物語」の構成を行う。語りの戦略が総動員されて、恐怖世界の構築に邁進する。そして世界の構築が成功したかに見える時点である変化が起こる。もはや「物語」が認められない局面が現れるのである。すでに19世紀においてティソなどの著作に批判が浴びせられることは確認した。それは単にティソなどの学説が信憑性を持たなくなったとか、学問的な信頼性を失ったなどといった次元の問題ではない。オナニズムについて「物語」を作っていくという姿勢そのものがみとめられなくなったということでもある。フーコーが18世紀から19世紀にかけて誕生していく新たな権力機構について論じていたように、いまやあらたな「語り方」が求められているのである。それはもはやかつてのようなオナニズムをめぐる「物語」ではあり得ないだろう。

比喩を使って考えてみよう。全速力で走る馬車を想像してほしい。御者は鞭を使ってスピードを上げている。これはオナニズムを用いて恐怖の物語を最大限に作り上げようとしていることを表していると思ってよいだろう。そして前の方に向かって道が伸びている。その道は18世紀を貫いて19世紀まで続いているのだろう。御者はスピードを上げるのに精一杯である。いつしか道がそれまでの砂利道から舗装された道路へと変化しているのに気づかない。その一途さが反オナニズム運動によせる熱意の表れと理解することもできるだろう。馬車で舗装路を走ることはできるが、それはどうしてもミスマッチとなる。馬車は、そのうちに自動車に取って代わられるだろう。オナニズムを

めぐる言説も同様に馬車から自動車に変わるように、18世紀タイプから19世紀タイプに変更される必要がある。それが新たな権力といかなる関係を結ぶかについては、別の機会に譲ることにしたい。

注

(1) 性をキーワードとして、近代の解放を語ろうとする動きは多様な展開を示している、その一端でさえ触れることは難しいが、特に現代に近いもので、政治的に大きな意味をもち、社会的に重要な影響力を与えたものとしては、以下のものが考えられる。

ウィルヘルム・ライヒ、『ファシズムの集団心理』、せりか書房、1982年。

マルクーゼ、『エロスの文明』、紀伊国屋書店、1956年。

またそれ以外にもオナニスムが重要な役割を果たす、『眼球譚』、『C 神父』などの文学作品を書いたジョルジュ・バタイユなども忘れることができない。

さらに、オナニスムに主題を限定して、研究を展開したものとしては、以下のものがあげられる。石川弘義、『マスターベーションの歴史』、作品社、2001年。

金塚貞文、『オナニスムの秩序』、みすず書房、1982年。

特に最近の総合的研究の中でオナニスムを扱ったものとしては以下のものがあげられる。

Alain Corbin et al., Histoire du Corps 1. De la Renaissance aux Lumières Seuil, 2005, pp.213-234.

(2) ジョン・スタンジェ、アンヌ・ファン・ネック、『自慰 抑圧と恐怖の精神史』、原書房、2001年、43-45ページ参照。

(3) 同書、27ページ参照。

(4) マリー・アントワネットの伝記作者であるツワイクは、以下のような記述をしている。

「…この出来事はマリー・アントワネットがまだタンブルにいる頃に起こったことであるが、これで片付いたように思われ、忘れ去られてしまっていた。しかるにある日、シモンあるいはその妻が、この早熟の甘やかされた子どもが、ある種の子どものらしい悪戯、誰も知っている「独りの快楽」にふけているのを発見する。現場を押さえられた子どもは自分の行為を否定するべくもない。誰からこういう悪習慣をつけられたのかとシモンに問い詰められて、不幸な少年は、母と叔母がこういういけないことを仕込んだのだと申し立てる、あるいはそういうふうに言わせられたのである。この「牝虎」のことならどんなことでも、どのような悪魔的なことでも本気に信ずるシモンは、さらに追求の手をゆるめず、母の不行跡に本気にかんかんになって、少年を問いつめ、結局少年に、タンブルで二人の悪人がしばしば彼を寝台に連れこみ、母が自分にいたずらをしたと、言わしめるところへ持って行ったのである。」

シュテファン・ツワイク、『マリー・アントワネット』(下)、岩波文庫、1980年、290ページ。

またこの事件については、ジョン・スタンジェ、アンヌ・ファン・ネック前掲書、111-112ページ参照。

革命期において、マリー・アントワネットは革命派と称する人々からの批判、揶揄の対象となった。そして、その際も性的な行動の奔放さが虚飾をまじえて、誇張されていく傾向にあった。たとえば、そうしたものの例として、著名者不明の以下のようなパンフレットがある。

Fureurs utérines de Marie-Antoinette, Femme de Louis XVI, 1791.

(5) たとえば、以下のような記述を参照のこと。

「(…) オナニズムの害は人類にとって、これまでにないほどの脅威となるもののひとつとみなされる。(…) 取るべき効果的な手段としては、予防措置を講じることである。そうすることで、悪しき現状を食い止めるとともに将来の惨状を阻止し、想定しうる全ての事態を避けることができるからである」

Dictionnaire de médecine usuelle, tome II, Didier, 1849, pp.549-550.

(6) 特に生氣論に関する議論については、以下参照。

寺田元一、「18世紀生氣論の成立と生命の科学化」、『精神医学史研究』Vol.8-1、2004年、25 - 32 ページ。

寺田元一、「フランス 18 世紀における創発論的自然観の研究」(科研基盤研究 (C) 研究課題番号: 13610046) 2004年、1 - 56 ページ。

Roselyne Rey, *Naissance et développement du vitalisme en France de la deuxième moitié du XVIII^e siècle à la fin du Premier Empire*, Oxford, Voltaire Foundation, 2000.

(7) たとえば、以下参照。

Claude-François Lallemand, *Des pertes séminales involontaires*, Echet Jr, Librairie de la Faculté de Médecine, 1838, p.513-514.

(8) 『オナニア』の正式の題名は以下の通りであり、また発行年については、様々な説がある。

Onania or the Heinous Sin of Self-Pollution, Thomas Crouch.

この書については、以下参照のこと。

ジョン・スタンジェ、アンヌ・ファン・ネック、前掲書、53 - 82 ページ。

石川、前掲書、14 - 23 ページ。

(9) ティソの伝記的な事実については、以下参照のこと。

Théodore Tarczylo, *Sexe et liberté au siècle des Lumières*, Presses de la Renaissance, 1983, p.295.

ジョン・スタンジェ、アンヌ・ファン・ネック、前掲書、83 - 102 ページ。

石川、前掲書、24 - 26 ページ。

ティソの『オナニズム』の正式な題名は以下の通りである。

Samuel-Auguste Tissot, *L'onanisme, ou Dissertation physique sur les maladies produites par la masturbation*

この論文においては、1991年に復刻された Editions de la différence の版を用いることとする。

(10) こうしたデータの詳細については、以下参照のこと。

Tarczylo, *op.cit.*, pp.291-295.

(11) ただし、こうした古典からの引用、そして同時代の研究への言及の恣意性、曖昧性から彼の論究の基盤自体への疑いが19世紀以降強くなっていくことも事実である。

(12) とくにビヤンヴィルはその序文において以下のようにティソに対して讃辞をあたえている。

「人々は、『オナニズム』という力強い著作にどれほど恩義を受けていることだろう。高名なるティソが力をこめて描き出す、真に迫った怖ろしいイメージの数々は、何と有益であることか。」

M.-D.-T. de Bienville, *La nymphomanie ou traité de la fureur utérine*, Office de librairie, 1886, p.2.

なおビヤンヴィルについては、以下も参照のこと。

石川、前掲書、58 - 66 ページ。

また影響力の大きさという観点から、当時の記念碑的な刊行物である『百科全書』の項目 *Manstupration* はティソの見解に忠実に従っていることも指摘しておくべきだろう。

影響については、特に下記参照。

ジョン・スタンジェ、アンヌ・ファン・ネック、前掲書、103 – 132 ページ。

- (13) Michel Foucault, *Les anormaux*, Seuil/Gallimard, 1999, pp.221-222. (ミシェル・フーコー、『異常者たち』、筑摩書房、2007年、260 – 261 ページ)。
- (14) Foucault, *op.cit.*, p.222. (フーコー前掲書、261 ページ)。
- (15) Foucault, *op.cit.*, pp.234-235. (フーコー前掲書、275 – 276 ページ)。
- (16) Samuel-Auguste Tissot, *L'onanisme*, Editions de la différence, 1991, pp.15-16.
- (17) このような社会的有用性の重視は、18世紀の演劇をめぐる論争にもみることができるだろう。18世紀において、演劇は悪しき情念を描写する恐れもあるが、その描写の過程を通じて、悪しき情念の浄化をはかることができるということから、演劇を擁護しようとする動きが存在したのである。
- (18) M.-D.-T. de Bienville, *op.cit.*, pp.1-2.
- (19) Tarczylo, *op.cit.*, pp.222-223.
- (20) Tissot, *op.cit.*, pp.44.
- (21) Tissot, *op.cit.*, pp.44-46.
- (22) Bienville, *op.cit.*, pp.116-118.
- (23) J.L. Doussin-Dubreuil, *Lettres sur les dangers de l'onanisme*, Roret, 1825, pp.6-7.
- (24) Lallemand, *op.cit.*, pp.513-514.
- (25) Lallemand, *op.cit.*, pp.517.
- なお手紙による症例報告などにたいしてもラルマンは批判している (Lallemand, *op.cit.*, p.514 参照)。
- (26) Jean-Jacques Rousseau, *Oeuvres complètes tome I*, Collection de la Pléiade, Gallimard, 1959, p.981. (ジャン＝ジャック・ルソー、『ルソー全集』第3巻、白水社、1979年、363 ページ)。
- また当時の民衆の動きについては、以下参照。
- Arlette Farge, *Vivre dans la rue*, Gallimard / Julliard, 1979.
- また当時の具体的な証言としては、以下参照。
- Jacques-Louis Ménéra, *Journal de ma vie*, Albin Michel, 1982, pp.33-34.
- (27) こうした恐怖の形象については下記参照。
- ジャン・マリニー、『吸血鬼伝説』、創元社、1994年。
- 丹治 愛、『ドラキュラの世紀末』、東京大学出版会、1997年。